

山形大学歴史・地理・人類学論集

第12号 抜刷

〔書評〕

新宮 学 著『北京遷都の研究—近世中国の首都移転—』

曹 永憲 (韓国 弘益大学 歴史教育学科)

徐 仁範 訳 (韓国 東国大学 史学科)

山形大学歴史・地理・人類学研究会

2011年3月

〔書評〕

新宮 学 著『北京遷都の研究—近世中国の首都移転—』
(汲古書院 2004年)

ARAMIYA Manabu, *A Historical Study of the Capital Transfer
to Peking in the Ming Dynasty*

曹 永憲 (韓国 弘益大学 歴史教育学科)

徐 仁範 訳 (韓国 東国大学 史学科)

今日、中国の浮び上がる力量と同時に、それにつれて上昇する首都北京の大切さを考慮する時、北京がどのような過程を経て中国の首都として定着するようになったのか、そして北京が中国の首都に定着したことがどのような歴史的意味を持っていたのかを吟味することは、元・明・清代を専攻する研究者だけではなく、首都がもつ地政学的重要性に注目する人々にも意味ある作業になるであろう。

すでに世界の学界では、ずいぶん前からクビライがなぜカラコルムから大都(現、北京)に首都を移したのか?、元朝を追い出して南京に首都を建てた明朝がどうしてまた北京に首都を移したのか?、そしてこのような首都移転がどのような要因で清末まで相変わらず維持されたのか?、等々についてさまざまな観点から問題解決が試みられてきた。2004年に出版された新宮学教授の『北京遷都の研究』は、このような既存の研究を十分に踏まえながら、永楽帝の北京遷都を明初の政治秩序の再編過程として把握している。管見の限り本書は、概説書ではなく北京遷都に関する研究書としては1976年に刊行されたファーマー (Farmer, Edward L.) 教授の研究¹⁾以来

の唯一の研究書であり、新宮教授が2002年に提出した博士学位論文の加筆補訂版でもある。今後北京を含めた首都に関連ある研究者たちが必ず参照しなければならない価値ある研究書である。そして北京遷都と密接な関連がある大運河を研究する評者にも、大変刺激を与えてくれる研究であったので、多少遅れた気もするが、一応その内容を紹介したいと思う。

本書は、研究史の整理である序章と七章からなる本論、そして北京遷都と間接的な関連を持っている二本の附篇論文等で構成されている。目次は次のようである。

- 序 章 北京遷都研究序説
- 第一章 初期明朝政権の建都問題について——洪武二十四年皇太子の陝西派遣をめぐる
- 第二章 明初の燕王府をめぐる諸問題
- 第三章 北京遷都——永楽遷都プロジェクトの諸段階
- 第四章 北京巡狩と南京監国
- 第五章 南京遷都——永楽十九年四月北京三殿焼失の波紋
- 第六章 洪熙から宣徳へ——北京定都への道

第七章 北京定都——正統年間における奉天殿再建と首都空間整備

附篇一 明初北京への富民層強制移住について——所謂「富戸」の軌跡を中心に

附篇二 明末清初の諸史料にみえる燕王府＝西苑所在説の再検討

附篇三 北京遷都関係年表

結語

目次を一覧してすぐ分かるように、本書は、明初首都が南京（＝金陵）に定められて以降、北京に遷都するまでの過程、さらにまた南京に還都するという決定、そしてそれにも拘わらず再び北京が首都として定着するまでの一連の過程を時間順に描いている。もちろんその中でも最後の部分にあたる南京還都（第五章）と北京定都（第六章）の過程は、すでに著者が1993年に発表した論文であり、大部分の章・節も個々の論文の形式で発表されたことがある。北京遷都に関心ある研究者なら、本書の基本的なアイデアと論証内容については刊行以前からよく分かっているはずであろう。それにも拘わらず本書を一読して見れば、その間、著者の個別的な北京関連論文が明初の政治史に関する大きい構図を持ちつつ、どれほど体系的に発表されてきたのかが分かるであろう。したがって、首都が北京だという古い常識の中に馴れてきた読者たちにとって、決して遷都の過程が‘自然に進行されなかった’ことに、少なからず驚きを禁じ得ないであろう。すなわち、本書は、北京遷都を一つの政治的事件として把握する傾向性を拒否しつつ、洪武帝から正統帝に至るまでの時期を、初期明朝の政権確立過程として把握し

ている。もう少し詳しく区分してみると、①南京首都→②両京体制（1403～20）→③北京遷都（1421～24）→④南京還都（1425）→⑤北京定都（1426～41）のような紆余曲折の後、明清時代を象徴する首都としての北京が誕生したという。

このような流れの中で、本書の内容を短く整理すれば次のようである。まず第一章では、洪武二十四年に皇太子朱標が陝西に派遣された理由を究明している。それは『明史』巻一一五、「朱標伝」を根拠にしてすでに知られているような長安（西安）への遷都の可能性を打診するためではなくて、山西・陝西地域に分封された諸王たちを牽制して北辺防衛を視察するためであったという点を明らかにした。さらに皇太子が派遣された洪武二十四年は、すでに洪武帝が南京に富民の強制移住を実施するなど本格的に首都建設を推進した時期（洪武八～三十一年を南京の第二次建設ラッシュ期として把握）であったので、皇太子派遣を西安遷都の事前の布石作業として捉えることは困難であるという。このような指摘は、永楽帝の北京遷都は、もはや洪武帝が内密に行おうとした北方遷都の一環ではなく、永楽帝の独自の政治的選択であったことを強調するだけでなく、洪武帝死後に発生する燕王朱棣（永楽帝）による政治クーデタを暗示している。

第二章は、まず洪武年間以来北平（後の北京）に設置された燕王府の所在地を検討し、『太祖実録』と高麗使臣権近の『奉使録』などを根拠に、その位置が皇城内の太液池の西側の「西苑」ではなく、太液池の東側、すなわち元朝の大内宮城であったことを明らかにした。また建文・永楽年間に三度も編修された

『太祖実録』の批判的な検討を通じて燕王に対する分封は洪武帝の特別な考慮から行われたことではなく、当時軍事的要衝地として知られた西安・太原・北平に第二子以下の諸王を順に派遣したにすぎないと強調した。そして燕王府が元朝の宮城を利用したこともまた既存施設を活用することによって財政的損失を減らすための手段に過ぎなく、他に別な意味が含まれた決定ではなかったという。

以上が北京遷都の意味を理解するための前提であったとすれば、第三章からは北京遷都を本格的に取り扱っている。特に第三章は、永楽年間に行われた北京遷都を、前段階から第四段階までの五つの段階に分け、各段階で進行される遷都過程を再構成した。靖難の変以後に荒廃した北平一帯に対するさまざまな復旧策が実施されたことを前段階とした。第一段階（洪武三十五～永楽四年）には、北平を北京に昇格させるとともに北京建設が始まり、本格的に南京と北京が一緒に浮かび上がる「兩京体制」が始まった。第二段階（永楽四～永楽十年）では、初めて皇帝の北京巡幸が始まり、皇帝不在の南京では皇太子（後の洪熙帝）が監国としてその役割を果たした。第三段階（永楽十～永楽十四年）では、第二次巡幸と同時に遷都準備が進められ、以前の燕王府が撤去され、別に視朝所（西宮）が建てられることを本格的な紫禁城造営の序幕として把握している。最後の第四段階（永楽十四～永楽十八）には、完全に南京と離れるようになる第三次巡幸が始まると同時に、宮殿造営が完了して首都としての機能を行うためのさまざまな官庁などが建てられた。そして永楽十九年（1421）正月の元旦に新しい宮殿で朝賀の儀式が盛大に行われることで、初め

て北京は「行在」から京師に昇格することになると同時に、南京は副都としてその地位が下げられた。このように遷都過程を厳密に区分したのは、永楽帝の北京遷都を明朝最大のプロジェクトであると把握する著者の観点が反映されるとともに、それほど遷都がいろいろな突発事件などを考慮しながら「人」と「物」を長距離に移動する緻密な作業であったことを示してくれた。

第四章は、永楽年間の遷都過程で、永楽帝が実施した三度の北京巡幸期間に南京に残され監国の役割を背負った皇太子と、巡幸する皇帝との間での政治的力学関係を情報の集中という観点から分析した。三度の北京巡幸期間を全部合わせるとほぼ9年に達し、皇帝になった永楽帝は、遷都以前までには、事実上執権期の半分くらいを首都（南京）から離れて過ごしたことになる。毎回永楽帝は、「巡狩事宜」と「留守事宜」を頒布することにより、巡幸の際に皇帝自ら決定すべき事案と、監国の皇太子が処理すべき事案の分限を定めた。その結果、第一次、第二次巡幸では、情報の二元化により皇帝と皇太子との間に不協和音が引き起こされたこともあった。そこで永楽帝は、最後の第三次巡幸ではより多くの情報を自分に集中させて権力の統制不能現象（二元化）を阻もうとした。永楽十九年に朝賀の儀式に合わせて皇太子と皇太孫を北京に召還したことも、やはり権力を北京に統合させて終止符を打ったことであったと強調した。

第五章と第六章では、永楽十九年から宣徳年間まで京師に昇格した北京の地位が再び動揺する過程とその背景要因を分析した。このような動揺を引き起こした直接的な事件は、遷都から三ヵ月後に落雷で紫禁城の三殿（奉

天・華蓋・謹身殿)が焼失したことであるが、その根底には、遷都敢行による物的・人的負担が加重され、江南から北京まで物資を運送すべき物流の負担感を反映する朝野の反対輿論があった。したがって、遷都の直後に起きた落雷は、偶然の気象現象ではなくして天の「譴責」として理解された。このような輿論は、三殿の焼失以後、永楽帝が官僚たちに陳言の機会を公式的に許すことにより表面に浮かび上がった。それにも拘らず、北京遷都の正当性を確保しようとする永楽帝は、寧ろ漠北への親征を繰り返して敢行したが、永楽二十二年に親征から帰還する途中で死亡した。洪熙帝は、即位するや南京遷都を正式に決定したが、これは、根本的に遷都により発生する物流の側面での負担が民力を疲弊させたという輿論に副うことであったと把握した。ただ、南京への遷都が意図どおりに行われなかったのは、洪熙帝が在位十ヵ月で急死したためであり、さらにその後を継いで帝位した宣徳帝が先帝の決定にも拘らず、北京に留まりながら洪熙帝の献陵を南京ではなく北京の西北地域に築き、南京の皇城に対する補修工事を中止させるなど、北京を固守する努力が続けられたからである。この部分において、著者は、洪熙帝が実施した「経済調整策」(たとえば、南海遠征の中止及び北京文武官と兵士に対する俸給の改善など)が相当な効果を取めたことは、逆に洪熙帝が推進しようとした南京遷都に対するマイナスの要因として作用したと解釈した。なお宣徳帝もまた北京造営を再開する際に漕運制度を整備した。これもまた南京遷都の主張の核心であった物流の障碍を相当部分補ったと把握した。

最後に、第七章では宣徳～正統年間に行わ

れた北京の空間整備を分析し、その結果として北京への定都が完成されたことを明らかにした。特に正統元年から三殿二宮と京城九門の城楼及び中央官庁に対する修復工事が大々的に行われた結果、正統六年(1441)十一月に、皇帝は再建された奉天殿で21年ぶりに再び朝賀の儀式を行った。この時、北京の諸官庁に付けられた「行在」という名称は再び削除されることになり、三殿の焼失以後動揺していた北京の首都としての地位は名実ともに回復されたと評価した。以後、1449年に正統帝がモンゴル親征に参加したが、土木堡でエセン軍に捕えられた危機の瞬間にも京師北京の地位がほとんど動揺しなかったことは、もはやその時期までには首都空間が形成されて北京を中心とする国家体制が確立されていたからである。

以上の内容を総括して見れば、本書は、著者が意図したとおりに、北京遷都が明初政権の確立過程であったことを大変緻密に証明したことが分かる。すなわち、既存の北京遷都に関する研究の大半が永楽帝個人の政治行為として把握したり、あるいは明朝政権の基盤が確立される洪熙初年(1425)までを分析の対象としたりしていたが、本書は正統年間の軌道修正過程までを包括して「北京遷都プロジェクト」の全体像として把握している。このような包括的な処理方式は、既存の北京遷都を永楽帝個人の特性や政治功績で評価した研究²⁾において見過ごされてきた側面、すなわち永楽帝死後に進行された南京遷都推進の動力とその限界を考慮して、北京遷都の最終的成功理由を説明することができた。また本書は、従来日本の学界を中心に把握されてき

た明初の政権基盤の変化、すなわち北京遷都を「華南体制から統一体制へ」に転換させたとか、あるいは「南人政権から統一王朝へ」に変化したという重要な根拠として提示する観点³⁾をもまた肯定しない。寧ろ著者は、大都（北京）に遷都することにより遊牧世界と中華世界を統合しようとした元朝と明朝を連続的に把握しようとする一連の研究⁴⁾と通底すると思われる。本書の第一章と第二章で、洪武帝の遷都の試みと永楽帝のそれとを明らかに区別したのもまたこのような問題意識から見ると、その意味が明らかになる。

これは著者が本書で打ち出したように、北京遷都とは政治的な一事件で止まらず、社会・経済全般にわたった国家システムの変化という観点とも一脈相通ずる。著者はここからまた一步進んで北京遷都をいわゆる「北京システム」の構築過程として把握した。著者が名付けた「北京システム」とは、政治的中心と経済的重心か南北に分裂されていながらも相補的な機能を維持する国家的システムを指称する（533～536頁）。南北の分裂局面は中国古来の地理的な要因も重要であるが、10世紀以降北方遊牧民族の台頭と南北の経済的格差を前提とする。著者は、このような南北分裂の構図が元朝の外的な統一時期にも事実上解消されなかったと理解した。華北と江南で行われた異なる税法をその格好の事例として挙げている。結局分裂された南北の社会統一という時代の課題は、モンゴル支配に終止符を打った明朝政権にそのまま受け継がれ、洪武帝は里甲制を全国的に施行して首都南京と中都（鳳陽）を建設することにより、このような努力を傾けたと評価した。しかし洪武帝のこのような努力は、中都建設を断念して南京

に首都を定着することにより、事実上失敗した。反面、永楽帝の北京遷都は再び経済的重心地と政治的中心地を分離し、両者を繋ぐため漕運などの物流を整備することで新しい可能性を導いたと把握した。第五章と第六章で、南京遷都の激しい輿論の中で京師の位置が南北で揺れたことを強調したことは、それほど分裂された構図を一つに纏めるためのシステム構築が難しかったことを表すことである。結局、北京遷都は正統年間に入って終止符を打つことにより、「北京システム」もまた完成された。200余年後に中国を占領した満洲族政権もまた首都を北京に維持することにより、18世紀末まで「北京システム」は成功裏に維持されたと評価する。

実は、序論と結論で主に言及された「北京システム」の問題が、本書の主要な分析対象だと見ることは難しい。しかし本書は、15世紀前半期の40余年の政治史に関する緻密な描写に止まらず、中国史の全般的な流れに一画期となる北京遷都に関する巨視的な接近という研究史的な価値を提示したという点で、このような意味付与は大胆でありまた斬新でもある。さらにとっても小さなエピソードであっても巨視的な歴史的流れの中で評価しようとする試みは、研究者たちがそれを承けつぐべき価値あることは確かである。

ただ本書を精読して関連部分を再三考えたにも拘わらず、相変わらず残る疑問は北京遷都がどうやって政治の中心と経済の重心を有機的に一体化させたのかである。著者もこの問題について二度言及された。第一は、三殿焼失以後の南京に遷都しようとする輿論は北京遷都によって引き起こされた南北物流の難しさのためであったと述べた。第二は、それ

にも拘わらず、結局北京定都が成功した背景にも漕運制度の整備を通じて物流負担の解消があったと指摘した。つまり政治的中心地を経済的重心地から分離させる際、その反対と支持を決める輿論の決定的な根拠は、やはり両者を繋ぐ物流問題にあった。そうだとすれば、北京遷都が完成される過程で南北を繋ぐ物流問題が遷都の輿論を主導するほどの深刻な困難に逢着したのか(324~328、351~357頁)。著者の主張のように、宣徳年間にそれが決定的に改善されたのか(380~384頁)。この問題は、「北京システム」を支える重要な主題であり、明清時代の北京を中心とする全国的な物流と財政システムを理解する手掛かりと見られる部分であるが、惜しくも本書にはこれに関する具体的な分析が提示されていない。ただ宣徳年間に成立した漕運方式の改善(支運法から兌運法での変化)と漕糧額の変化に関する既存の研究⁵⁾を引用しているが、これらはみな制度的な変化と現象的な物流量の一部だけを提示したにすぎない。

寧ろ北京遷都が完成された1441年以後、南北物流を担う大運河に「河患」が次第に深刻になり北京の民心が慌しくなり海上の漕運が模索された⁶⁾。結局、北京遷都期間に物流問題に関して刮目すべき改善がなされたとは評価しにくい部分である⁷⁾。この問題は「北京システム」という大きな構図の中で、北京遷都を多様な政治的角度から接近しているものの、遷都の物的基盤であると同時にインフラを形成する大運河再建及び国家的物流の再整備という問題を本格的に論証しなかったことからくる避けられない疑問だと考えられる⁸⁾。

同じ脈絡で、著者は、遷都の意義を政治の中心と経済の重心の「相補的分離」ないしは

「南北一体化」と指摘しているが(384頁)、その具体的な意味が明確に伝わらない。すでに大田由紀夫氏も指摘したように⁹⁾、南北に異なる制度を適用しながら北京に首都を置いた元朝は「南北一体化」を成し遂げられなかった時代であり、同一の制度を適用しながら北京に首都を置いた明朝は「一体化」が成立した時代であると理解する見解は納得しにくい。もちろん元代と違って明代の北京は南京とともに両京体制というフレームの中で機能しているが、その差をもう少し明確に提示するために両京体制が明初以降果してどの時期まで実質的な補完性を維持したのか、そしてそれが政治的な象徴性を超え社会・経済的な側面まで、どれほど拘束力を発揮したのかを究明すべきであった。実際に明初の政治史を「両京制」という観点で注目したファーナー教授は、明初の北京遷都が北辺防衛を効果的に成し遂げるにより国内の統治安定を計ろうとする機能を行なったという点で、元代の北京との連続性を否定した¹⁰⁾。また首都と陪都の関係と役割分担を考察する際に、明代の両京と北方王朝である元と清の両京あるいは三京の性格は共通点よりは差異がもっと出てくる¹¹⁾。したがって、明初の北京遷都を「華夷一統」を達成する元朝との連続線上で把握するだけでなく、その性格を清代まで繋げることで把握される本書の主張がもっと説得力を確保するためには、「相補的分離」の実体となる社会・経済的なシステムを様々な観点で究明すべきである。たとえば元代の北京に物資を運送する際には大運河とともに海運が併用されたが、明代の北京遷都以降には海運が禁止されて流通路が大運河に一元化された。この点は、先に述べた物流問題とも繋がることで、

明清時代のいわゆる「北京システム」が元代のそれと区別される重要な基準となるかも知れない。

以上のように、幾つかの問題点を指摘したが、これは本書が取り扱っている主な論証とアイデアと直接に関わる部分であると思えずことは難しい。したがって北京遷都に関する本書の主な論証と研究史的価値はほとんど損なわれることはなく、今後首都の地政学的重要性と関連して「北京システム」という巨大な研究課題を学界に提示することができると思われる。多くの研究がすでに蓄積されている首都長安（西安）との比較だけでなく、首都論が提起されるたびに登場する開封・鳳陽・南京・杭州など競合する都市との比較優位性を量ることができるならば、首都北京に関する本書の価値はもっと豊かになるであろう。

【註】

- (1) Farmer, Edward L., *Early Ming Government: The Evolution of Dual Capitals*, East Asian Research Center, Harvard Univ., 1976.
- (2) 呉晗「明代靖難之役と国都北遷」、『清華学報』10-4, 1935。朱鴻『明成祖と永楽政治』、国立台湾師範大学歴史研究所、1988。張奕善「明成祖政治権力中心北移的研究」、『朱明王朝史論文輯』、台北、国立編訳館、1991。
- (3) 代表的には、萩原淳平「明朝の政治体制」、『京都大学文学部紀要』11, 1967 と檀上寛「明王朝成立期の軌跡——洪武朝の疑獄事件と京師問題をめぐって」、『東洋史研究』37-3, 1978（同『明朝専制支配の史的構造』、汲古書院 1995に再録）。檀上寛「初期明帝国体制論」、『岩波講座世界歴史』11、岩波書店、1997を挙げるができる。
- (4) 宮崎市定「洪武から永楽へ——初期明朝政権の性格」、『東洋史研究』27-4, 1969。大田由

紀夫「元末明初期における徽州府下の貨幣動向」、『史林』76-4, 1993。杉山正明『クビライの挑戦——モンゴル海上帝国への道』、朝日新聞社、1995。大田由紀夫「南京回帰——洪武体制の形成」、『名古屋大学東洋史研究報告—森正夫先生退官記念号—』25, 2001。

- (5) 星斌夫『明代漕運の研究』、東京、日本学術振興会、1963、第一章、呉縉華、『明代海運及運河の研究』、中央研究院歴史語言研究所專刊、43, 1961。
- (6) 曹永憲「明後期「短命」におわった漕糧の海運とその意味」、『歴史教育』100, 2006。
- (7) 曹永憲「北京首都論と大運河——明朝を中心に」、『中国史研究』55, 2008, 127~139頁では、大運河開通以後漕糧を始め朝貢品・土宜・私貨など物流量が急増したことに比べ、特権層の越権行為による大運河に関する体系的な維持及び補修はさらに困難になり、事実上運送能力の限界状況に逢着したことを指摘した。
- (8) これについては、元代と明代に首都北京への漕運に関する同時代人たちの認識を中心に問題の争点とその克服方案を総合的に整理した王培華『元明北京建都と糧食供給——略論元明人間的認識と実践』、文津出版社、2005を参照。特に400万石の漕糧運送のため、その3~4倍に達する1500万石以上の運送費用が消費される物流体系の非効率性に対する指摘（199~201頁）は、宣徳年間に成立した漕運方式の「改善」が果たしてどれほど効果的であったかについての再検討を求めている。
- (9) 大田由起夫「書評『北京遷都の研究』」、『史学雑誌』114-7, 2005, 98~99頁。
- (10) Farmer, Edward L., *Early Ming Government: The Evolution of Dual Capitals*, East Asian Research Center, Harvard University Press, 1976, 189~191頁。
- (11) 曹永憲「清朝の首都論と皇帝の巡幸」、『中国の清史編纂と清史研究』、東北亞歴史財団、2010。曹永憲「元明清時代首都北京と陪都の

変遷』、『歴史上の首都と別京』2010年歴史学会秋季学術大会発表集、2010、11～19頁。

〈附記〉

本書評は、韓国の中国史研究を代表する学術誌『明清史研究』27輯（2007年）に韓国語で発表された、拙著『北京遷都の研究』に対する書評の日本語訳である。評者の曹永憲氏は、韓国弘益大学歴史教育学科の助教授である。明清時代の漕運史を専攻する新進気鋭の研究者の手になる本書評は、物流問題を中心とする拙著の残された課題を鋭く浮かび上がらせてくれた。

このたび、曹氏自身によって一部加筆された書評を本誌に翻訳掲載するにあたり、その仲介と全訳の労を取っていただいたのは、同じく韓国の東国大学史学科の徐仁範副教授である。旧知の徐氏は、主に明代軍政史と近世東アジア海域史を精力的に研究されている。北京遷都をめぐる諸問題を東アジア各国の研究者がともに議論することの重要性に鑑み、本書評の日本語訳を引き受けてくれた。この場をかりてあらためて両氏に謝意を表す。

（新宮 学）